った。結局県の土木技術の実地調査、県と郡長の指示・調停により、不当工事部分を除去して一件落着したのは同年一一月のことであった。松畷には実に見事な老松の大木が約二〇〇本も連なっていた。それは、城下町出石の懐かしいシンボルであったが、堤防の基盤を頑強にする役割も果たしていた。

北但大震災と出石

一九二五年（大正一四）五月二三日午前一一時九分五七秒、円山川河口付近約六〇キロメートルの深さを震源地とするマグニチュード六・五～七・〇の烈震が発生し、但馬・丹後の日本海沿岸地域を襲った。いわゆる、北但大震災である。被害の最もはなはだしかったのは、震源に最も近い津居山湾口を中心とする半径一二キロメートルの範囲内で、被害総計は、死者四二八名・家屋全壊一二九五戸・焼失家屋二一八〇戸に上り、城崎町及び豊岡町は有史以来最大の壊滅的打撃を蒙った。

写真 127　北但大震災の報道記事（『大阪朝日新聞』1925年〔大正14〕5月24日付）

但馬地方には、古来より地震に関する記録がほとんど存在せず、「但馬に地震なし」との説が信じられていたが見事に覆えされた。出石にはそれほど大きな被害はなかったが、家屋半壊が神美村四〇戸・小坂村一六戸・出石町一〇戸に上った。小坂小学校の沿革史は大地震勃発時のようすを「時に尋常三年以下は教授終りて帰宅せり。六年は校外に写生に出で居り、教室に於て学習せしは五年と高等科となりき。硝子戸・大戸・銃架・本

写真 128　北但大震災直後の大橋付近

箱・教師机等多数倒壊せしも幸一人の負傷者も出さざりき」と記している。また、出石川本流右岸の松畷堤防は、数百間にわたって大龜裂を生じたために通行が危ぶまれる状態であった。

豊岡町の倒壊家屋多数で大火災による死傷者甚大との情報に接し、出石町及び付近村在住の医師、それに在郷軍人の中で救急治療の心得のある者が直ちに召集され、救急衛生材料や食料を携行して自動車で救援に赴いた。引き続いて在郷軍人・青年団員・消防夫などが非常召集され、当日と翌二四日に一五〇〇名が出動して救護に当たったが、その後二九日までは毎日一〇〇名ずつ、三〇日以後も五〇名ずつの救援隊が出石郡から派遣された。また、副食物（主として梅干し・漬物・らっきょう）・握り飯の焚き出しなどの物資救援も敏速に実施された。

震災直後の時期において、「豊岡町の罹災傷病者の救護は出石郡独占の観」があったと「出石郡役所事績」は記している。

村方の年中行事　ここで農村生活における年中行事についてふれておくことにする。

現在の我が出石町の区域内全般にわたっては残念ながら適当な資料が得られなかったので、隣接する豊岡盆地平野部の純農村集落である旧神美村と八社宮地区（旧中筋村）に関する資料を借りて眺めてみ